

日本社会心理学会会報

191号

発行 日本社会心理学会 <http://www.socialpsychology.jp/>

編集・制作 池田謙一

113-0033 東京都文京区本郷 7-3-1 東京大学大学院人文社会系研究科 池田研究室

2011年8月15日

がんばろう！「はやぶさ」のように

— 第52回大会へのお誘い

大会準備委員会委員長・吉田俊和

日本社会心理学会第52回大会は、9月18日(日)と19日(月・祝日)の2日間にわたり、名古屋大学東山キャンパスの全学教育棟を主会場として開催いたします。

今でこそ、「開催いたします」と高らかに宣言していますが、東日本大震災という未曾有の災害直後には、日本発達心理学会の年次大会を始めとし、多くの行事が中止を余儀なくされ、その後も長引く原発問題に、一時は、「本当に開催出来るだろうか」と悲観的な考えも横切りました。何よりも、発送直前の1号通信が北関東と東北地域の会員のみなさまに届けられないという事態が生じました。しかし、インターネットの威力は抜群で、大会のホームページにアクセスできれば1号通信もダウンロードできるので、甚大な被害を受けられた会員の方以外は、大丈夫であるということになりました。大会参加や発表の申し込みを1週間延長しましたが、例年並の申し込み数があり、準備委員一同、安堵いたしました。

前置きが長くなりましたが、本年の最終発表件数は、口頭発表が131件、ポスター発表が284件です。個人発表の当初申し込み数は441件でしたので、キャンセル率は6%です。また、ワークショップの申し込みは12件ありました。

大会1日目の総会終了後には、大会準備委員会が企画した「社会心理学における社会とは何か？」というタイトルのシンポジウムが行われます。

また、2日目の最後のセッションで、広報委員会と大会運営委員会の共同企画によるシンポジウム「東日本大震災を乗り越えるために：社会心理学からの提言」が行われます。当初は、ワークショップで震災関連の企画があることを期待していましたが、なかなか出てこなくて、準備委員会から働きかけようとしていた矢先に、広報委員会から打診があり、感謝感激いたしました。もちろん、この企画は、社会心理学会からの情報発信として重要なので、公開シンポジウムにしますし、Ustreamでも中継いたします。

ワークショップの中の「Social Psychological Perspectives on the Development of Antisocial Youth」は、イタリアから Gini

先生をお招きしており、Special Workshopとさせていただきます。この会報がお手元が届く頃には、Web上でもプログラムが公開されます。

大会会場は、大学構内に地下鉄の駅があり、比較的便利な立地条件です。名古屋駅やみなさまが宿泊されたりするホテルからは、大体30分~40分以内で到着出来るのではないかと思います。大会会場の都合で、日本心理学会の翌日開催となり、大会前日に開催される会議にご出席の先生方には、ご不便をおかけして申し訳なく思っています。

総会は約500名収容可能な経済学部のカンファレンスホールを借りて、天むす弁当を提供する予定です。

懇親会も、500名収容可能な名古屋メルパークを最初に確保し、みなさまのご期待に沿えるような名古屋メシをご用意させていただきます。当日参加も受け付けますので、ぜひご参加ください。

季節的には、かなりの暑さが予想されます。今年は6月後半から30度を超える真夏日が連続しています。先日、気象庁から発表された3ヶ月予報では、9月の名古屋は、例年通り暑いとのこと。日本全国節電

● 今号の主な内容

- 【2面】 第55回シンポジウム関連
- 【5面】 東日本大震災復興支援サイト
- 【6面】 若手会員、声をあげる
- 【7面】 社会心理学会を支えている方々
- 【9面】 新入会者名簿など

の呼びかけで、冷房は無理かと思っていましたが、交渉の結果、何とか大丈夫ということになりました。ご安心ください。

名古屋市内で前日、または翌日にちょっと立ち寄りたということであれば、世界一の大きさとクオリティを備えた名古屋市科学館のプラネタリウムが3月にリニューアル・オープンしました。鉄道好きの方には、JR東海の博物館「リニア・鉄道館」が同じく3月にオープンしています。もちろん、名古屋城へ行けば、話題の「おもてなし武将隊」が迎えてくれると思います。涼を求める方は、名古屋港水族館へお出かけください。

第52回大会は、東日本大震災から半年後に開催されます。冒頭の「がんばろう！はやぶさのように」は、日本全体が困難を乗り越え、元気になって欲しいという、大会準備委員会からの連帯のエールです。準備委員会およびスタッフは、とにかく元気が出る大会運営をめざしています。満点ではなくとも、来ていただけたら、ご満足いただけるよう心がける所存です。ぜひ、多くの会員のみなさまのご参加を、心よりお待ちしております。

(よしだとしかず・名古屋大学)

第55回 公開シンポジウム

「消費の病理：逸脱的消費者行動の現状に迫る」

「シンポジウム開催報告」

池内裕美

第55回日本社会心理学会公開シンポジウムは、6月18日(土)13時より、関西大学千里山キャンパスのソシオAV大ホールにて開催されました。梅雨を象徴するような天候にも関わらず、学会員はもとより多くの一般の方々にもお越し頂きました。20名ほどのご記名されなかった方を含めると、その数およそ150名にのぼっていたかと思われま

す。今回のテーマは、「消費の病理：逸脱的消費者行動の現状に迫る」ということで、購買や消費行動がもたらす「闇」の部分への接近を試みました。シンポジウム企画のお話を頂いてからこのテーマにたどり着くのに、ほとんど迷いはありませんでした。私自身が商学研究時代に消費者行動を専攻していたことも理由の一つなのですが、他にも大きな理由があります。それは、かねてから「社会心理学が消費者行動研究に、そして消費の現場に貢献できるとするならこのテーマだ！」と強く考えていたからです。

逸脱的消費者行動には、アルコールやギャンブルへの依存や買物依存、強迫的にモノを溜め込む行為、常軌を逸した苦情行動、さらには窃盗や詐欺といった犯罪行為など様々な行為が含まれます。一般的な消費者行動に関する研究が最も進んでいる学問領域は、もちろん商学や経営学(マーケティング)ですが、こうした病理的なテーマを扱うには、マーケティング的アプローチでは限界があります。また買物依存や溜め込み行為に関しては、臨床心理学の領域でも、実はあまり学術的研究が進んでいないようです。そこで本シンポジウムでは、この極めて学際的ともいえる「逸脱的消費者行動」に焦点を当て、まずはこうした社会問題が

存在することを認識して頂いた上で、心理学がその予防や対策にどのような貢献ができるのか考えることを目的としました。当日は、唐沢穰先生(名古屋大学)の司会のもと、3名の話題提供者と1名の指定討論者をお招きし、計4名の先生方にご講演を頂きました。まずは、新潟大学人文社会・教育科学系准教授の神村栄一先生より、サービス財の病的消費ということで、先生のご研究テーマでもあるギャンブル依存(PG: pathological gambling)についてお話を頂きました。より具体的には、日本ではいかにPGが社会問題化しているのか、そもそも人はなぜギャンブルにハマり、なぜ抜け出せなくなるのかなど、実際のケースや統計を引用されながら非常にわかりやすくご紹介頂きました。

二人目は、私(池内)が「モンスター化する消費者たち」と題し、近年メディアでも注目されることの多い苦情行動について話題を提供いたしました。苦情が増加した心理的・社会的背景について考察すると共に、それに伴う対応者側の苦悩や施策について、自ら行ったインタビュー結果を中心に紹介させて頂きました。話し相手を求めてお客様相談室に電話をかける人が増え、お客様相談室が心理相談室化しているという事実は、消費の病理を超え、まさに現代社会の病理の一端を表していると思われま

す。話題提供者として最後にご登壇頂いたのは、NTTコミュニケーション科学基礎研究所の廣中直行先生でした。廣中先生からは、特に神経生物学の観点から「脳内の報酬系」や「報酬値」といった概念を基に依存に陥るメカニズムや、依存症に陥りやすい人の特性などについて非常に刺激的で示唆に富んだお話を頂きました。特に「依存症か否かを判断する一つの基準は、楽しいかどうか

か」というご指摘は、今後、買物依存や溜め込み行為といった消費の病理的側面を考える上で、非常に重要なポイントになってくるかと思われま

す。また、指定討論者である神戸学院大学人文学部教授の秋山学先生からは、総括的なコメントに加え、「買物=情動調整のための道具」といえるがゆえに、安心して快楽を享受できる(ハマることができる)仕組みづくりの重要性について、社会心理学的視点からご指摘頂きました。それはまさに第4の話題提供者といっても過言ではない、非常に奥の深い議論でありました。

このように今回は、4名の先生方からお話を頂き、その後フロアとの討論という流れであったため、例年より長時間のシンポジウムとなりました。それにも関わらず、会場で実施したアンケートを見る限り、参加者の皆さまには大変ご満足頂けたようで、企画者および関係者一同、心より安堵しております。本シンポジウムが、社会心理学に新たな研究視点をもたらす一つの機会となり、また少しでも消費者行動研究の発展に貢献し、さらには実務や消費の現場で問題を抱えておられる方々にとって、暗闇に射す一筋の光となれば幸いです。

最後になりましたが、開催にあたり多くの方々から大きなお力添えを頂きました。まずは会長や常任理事の先生方、事務局や会員の皆様、現場スタッフの方々、そして何より会場にお越し頂いた全ての方々に、この場を借りて心よりお礼申し上げます。※当日の発表資料を公開しておりますので、ぜひご覧ください。

http://www.socialpsychology.jp/index/frame02_sympo.html

(いけうちひろみ・関西大学)

参加記：「消費は快樂の神となり得るのか？」

～公開シンポジウム「消費の病理：逸脱的消費者行動の現状に迫る」の印象記に代えて～

金政祐司

私たちは、良いものが消費される社会ではなく、消費されたものが良いとされる社会に生きている。このように書くと、もしかしたら嫌悪感を抱く人もいるかもしれない。しかし、私たちは何かが多量に消費されていれば、それを良いものもしくは正しいものであると見なしやすい。私がここで使う消費という言葉は、単に売れるということだけでなく、人の欲望の対象とされること、選択されること、また、人からリファレンスされることなどをも含んでいる（正確に言えば、それらに対して人が金銭や物品、時間や労力を費やしているというプロセス）。消費されることはさらなる消費を産み出し、それは増殖する。このような現状においては、消費されれば必ずしも勝ちというわけではないが、消費されなければ必然的に負けは見えているといっても過言ではないだろう。

消費は私たちに断念することを断念させた。日常的にメディアから溢れ出る「よりあなたらしく」、「あなたの望みに合った」という言葉は、消費によって私たちは自分の願いを断念することなく叶えられるという幻想を抱かせるのに十分な根拠を与えてくれる。また、消費の前ではすべての個人は等しく扱われる「べき」ものとして存立する。消費の眼前においては老若男女すべての個人が選択の主体となり、また、サービスを楽しむべき主体となる。つまり、消費という場面においては（特に貨幣を伴う消費においては）、「そうでもない」自分、「それほどでもない」自分が客として神さま化する。さらに、極端なことを言えば、大勢の人々が難解なものを求めず、容易なものを消費することを良しとするのであれば、それに見合うものを作り上げればよい（作り上げられるべきだ）ということになるだろう。それらは「今すぐ役に立たないものはムダ」、「私にとって理解できないものは意味がない」という単純な発想と容易に結びつく。…などということを見ると、今回のシンポジウムのイシューである「逸脱的消費者行動」とは一体何なのだろうか、



左から、神村、池内、廣中、秋山、唐沢の各氏

という疑問にたどり着いてしまう。むしろ逸脱的でない消費などあり得るのだろうか？と。

さて、話題提供者の3名の先生方の講演内容を私なりにまとめてみた。もし実際の発表内容と齟齬があるとすれば、それは私の不徳の致すところ、どうかお許しいただきたい。まず、神村栄一先生は、ギャンブル依存 (PG: pathological gambling) の現況や人はなぜギャンブル依存に陥るのか、ギャンブル依存に陥った場合どのようにして立ち直ればよいのかについて臨床心理学的な立場からお話しされた。なぜギャンブルにはまるのかについては、ゲームとしてもしくはお金のやり取りとしてのスリルと興奮、ストレスの解消、エステームの確保などさまざまな要因が挙げられていた。また、ギャンブルへの依存は、好子出現型よりも嫌子消失型の強化で維持されており、そこから脱却には、社会的なつながり（思い掛せず時間ができたらまず奥さんに電話する）や代替行動（ギャンブル以外の時間の使い方を見つける）を活用することが有効とのことであった。

続く池内裕美先生は、消費者の苦情行動の実態、苦情が生じる心理的もしくは社会的な要因、また、苦情対応者の苦悩に対して社会心理学が提言できることについてお話しされた。個人的には発表内容以外のところで多大なる面白みを感じていたのだが、携帯やメールといったツールの普及が個人の感情と行動の近接性を促進するとともに苦情へのアクセスのハードルの低さというインセンティブを作り上げたこと、逸脱的

クレーマーは必ずしもそれ以前に存在するわけではなく対応者との相互作用のなかで産み落とされることなど、発表内容も当然興味深いものであった。また、苦情への対応が重要となる理由として、苦情対応に満足した人は苦情を誰にも言わなかった人よりも約4倍も再購入の意図が高まるという実証的研究についても紹介された。解決策の見えない苦情への有効な対応として、時、場所、人を変えるという方向性は、まさに社会心理学的な観点からの提言だな、と感じた。

廣中直行先生は、精神薬理学的の観点から、なぜ「逸脱」行動（もしくは依存）が起こるのかについて説明された。消費は快樂と密接に絡みついており、それは歴史的な儀式にも垣間見られること、消費を何か喜びを得るといふ行動と捉えた場合、それは脳の報酬系と関連する可能性があることを話された。消費においては、私たちは往々にして合理的ではない判断を下すことがあり、特に、ギャンブル課題において自身を熟慮性が高いと認識している者ほど、実は合理的な判断を下していないということは興味深かった。さらに、「逸脱」行動は、報酬（アクセスを誘発するもの）、心理（逃避など）、環境という3つの要因の関数であると述べられ、その際、環境要因の一つとして、ストレス発散の場としての「祭り」について言及されたときは、随分昔に読んだ吉本隆明氏の「共同幻想論」を思い出した。話題提供者のお三方で共通していたと思われる点は、消費行動において、逸脱的あるいは依存的か、そうではないかを隔てるポ

イントは、それを楽しみと思えるかどうかであり、ある事柄に囚われる、拘泥することで自身が苦しみ出すと逸脱的、依存的となるということであったように思う。ならば、消費における逸脱や依存とは、ある消費行動によって得るものと失うもののバランス（金銭や物品だけでなく、人間関係や信頼といったものも含め）について「常識らしきもの」を考慮しながら、自身の行動と感情をセルフコントロールできるかどうかの問題ということになるだろう。上記の話題提供を受けて指定討論者の秋山学先生は「私たちは気持ちよくなることに金を払う」という快楽消費について言及されたが、その際、私は不覚にも某アイドルユニットの投票権付きCDを想起してしまった。あれほどアングラ的な快楽消費システムを大衆化させた場合、果たして逸脱的、依存的な消費は苦悩やネガティブ感情を生み出すのだろうか（感情と消費行動があまりにも密接に絡み合いつぎているような気がする）。

さて、ここで、私は話題提供者の方々のお話、さらに言えば指定討論者の秋山学先生のお話も含めて、それらを繋ぐキーワードとして、権威の失墜もしくは大きな物語の凋落（喪失）を挙げてみたい。それは簡潔に言えば、社会の多くの人々が共有していた価値観やイデオロギーが崩壊し、社会規範の拘束力が弱体化するとともに、（ある意味幻想であったともいえる）権威や制度へ

の信頼感や敬意が霧散してしまうことを指す。上記の3つの話題について当てはめてみれば、神村栄一先生のお話は、「人は理性的であるべき」、「ギャンブルなどにはまるべきではない」という常識や社会的規範の弱体化の結果と捉えることもできるであろうし、池内裕美先生のお話は、生産という幻想的権威の失墜もしくは供給者と需要者の勢力の逆転の結果として理解することも可能であろう（未だ生産の幻想的権威を振りかざす一部の企業はあるが…）。また、廣中直行先生のお話は、組織や共同体が設定するストレス発散の場（祭りなど）が退去することで、個人が自主的にストレスを発散せざるを得なくなった結果であると考えられることもできる。

大きな物語の凋落、権威の失墜によって、私たちは「～すべきである」、「～すべきではない」といった社会的規範、権威や制度への盲目的な追従から自由になった。それは個人が常識やルールに縛られず自己決定をすることを可能にした。しかし、同時にそれは私たちに漠然とした不安を与えたとも言える。常識や社会的規範の拘束力が失墜する中で、個々人の価値観は分断され相対化されていく。何かを決断する際に、また、何かに自己を投資する際に、参照の基準が不明瞭になり、かつ決断や投資の責任を自己が背負うことになる。そのような状況においては、手短かに利益や快楽を獲得できる選択肢を取るか、決断を際限なく遅延

させるか、もしくは自己の決断の責任を他者に帰属させるというプロセスが優勢となっていくのは仕方のないことであろう。私はここで過去への憧憬を語りたわけではない。ただ、逸脱的、依存的消費行動が質的にも量的にも一定の限界値を超えて問題となっていく蓋然性を考慮すれば（というよりも逸脱的、依存的ものとそうではないものを明確に弁別することが不可能となった状況を鑑みれば）、秋山学先生が言及されたように私たちが安心して快楽を享受できるデザインとは何かについて思索することは不可避なことなのかもしれない（たとえそれがパターンリズムであるという批判を浴びようとも）。

最後にではあるが、今回のシンポジウムを聞いていて、以前に学生の言っていたことを思い出した。彼女は、どうも授業中に友達とお喋りしていて、それを教員に怒られたことに腹を立てているらしかった。彼女曰く「私は授業料払ってる客やのになんで怒られなあかんねん！」。教育は消費的な何かなのであるだろうか？もちろん、彼女の言葉に関してはさまざまな視点からの反駁が可能であろうが、私にはどれが妥当であるのかがよくわからない。是非、皆さんがその言葉にどのように回答されるのかについて学会などでお聞かせいただければありがたい。

（かねまさゆうじ・追手門学院大学）

東日本大震災復興支援サイトはさらに活動します

東日本大震災からの復興支援に際してわれわれ研究者ができることのひとつに、研究知見を現状の解釈や将来の予測のために資することができる。日本社会心理学会では、こうした提言を広報するポータルサイト（<http://bit.ly/jsspijishin>）を3月16日に立ち上げ、被災地にある研究者やこれまでも災害研究に取り組んできた研究者のみならず、何らかの役に立ちたいと願う研究者たちの数多くの声を届ける試みを実践してきた。本連載記事では、発信にご協力くださった会員と、現に被災地にある会員の声をお知らせし、今後の継続的な支援はどうあるべきかを考える手がかりとしたい。

「東日本大震災に際して社会心理学者に何が出来たのか／何ができるのか」

樋口匡貴

2011年3月11日に発生した東日本大震災、さらにはそれに引き続く福島第一原子力発電所の事故は、東北地方のみならず、東日本の広範な地域に甚大な被害をもたらした。また、被災地の外に住む人々の生活にも大きな変化があった。この大災害に対して、私たち社会心理学者には一体何がで

きるのだろうか。今回、この原稿を書く機会をいただいたが、社会心理学者が、あるいは人々が今後どのようにすべきか、といった大それた内容については、とても書くことができない。どうすべきかなど、とても私にはわからない。私自身現在まで、あれだけの圧倒的な現実の前で、一個人として、さらには職業人として一体何ができる

のか、悩み、逡巡してきた。本稿では、あくまでも私自身の個人的な行動と考えを振り返り、述べていきたい。

私は現在、インターネット上に「避難所生活で些細だが大切なこと」（http://blog.livedoor.jp/higuchi_ma/）というホームページを立ち上げ、情報発信をしている。このホームページは、避難所生活の中

で、着替えやトイレ、さらには髪型の乱れや装いなど、ある意味“取るに足らない”理由で恥ずかしく、つらい思いをしている方々を対象にしたものである。そういった方々に対して、私自身が取り組んできた羞恥感情の基礎研究から言えることとして、どう考えれば恥ずかしくなくなるか、あるいは周りの人はどのような配慮ができるかなどを記載している。“食べるものがない”、“寝る場所がない”といった問題の方がもちろん緊急度は高く、迅速な対処が必要であろう。しかしこういった大きな問題に対して、私にはできることがほとんど思いつかなかった。一方で、「好きな人の前で寝ぐせを見られてしまって恥ずかしい」、「洗った下着を人目に付かずに干したい」といった直接的に生死に直結しないことについても、私は重視したかったし、私が力になれるかもしれないという思いがあった。

なぜこのようなホームページを作成することにしたのか、その経緯について述べたい。3月11日の震災後数日間、私は自分自身に何ができるのか、本当にわからなかった。自分にできることは、一市民として、義捐金を送ることぐらいだと思っていた。社会心理学者としての自分に何ができるとはその時は考えていなかった。

そんなある日、確か3月14日ころだったかと思う。自宅で妻とこんな会話をした。

私「何かできないかと考えてみても、結局何もできないよね」

私「俺にできることなんて、結局ゴタク並べるぐらいなんだよねー」

私「はっ。ゴタクがあったじゃないか...」
このようなありふれた会話で、自分にできることの1つを見つけた。自分が知っている狭い範囲の中で、何かを書こうと決めた。

ちょうどそのころ、日本社会心理学会の広報委員会の先生方が「東日本大震災に関する社会心理学者からの提言」というリン

ク集のサイトを作成しておられた(<https://sites.google.com/site/jsspjishin/>)。その当時はまだコンテンツは少なかったが、何名かの先生方がすでに、被災地にある方々あるいは一般市民に向けた文書を公開しておられた。また、日本社会心理学会の広報委員会からも、参加を呼び掛けるメールが会員に向けて発信された。さらに、実際に被災された先生が震災直後からtwitterを通じて情報発信をしておられるのも拝見した。

これらの先生方に背中を押していただいたような気持ちになり、私自身も、情報をホームページにまとめ、日本社会心理学会が作成したリンク集に掲載していただこうと決めた。

こうして早速ホームページの作成を始めたものの、いざ作成を始めてみると、色々な意味で思い描いていたよりもはるかに難しい作業であった。専門家からゼミの学生まで、多くの人を力を借りて何とか現在の形のものを作成したが、何度も途中でやめようと考えた。

まず作成中に頭を悩ませたのは、内容および表現の“科学性”についてであった。読者として避難所生活を送っている人を想定したため、表現は極力平易にすることを心がけた。しかし、記載した内容の根拠となる実際の研究についてはどの程度紹介していくべきであったろうか。たとえば私が作成したホームページの中に、「(髪の毛の寝ぐせなどで) 恥ずかしい思いをしているかもしれない人に対して周りの人ができることは、見て見ぬふりをする事だ」といった記述がある。この記述は、実際に行われた社会心理学的実験の結果から予測できる内容である。しかし被災した人々にとっては、どのような科学的根拠があるかは二の次、三の次だろう。そこで、細かい情報は思い切ってすべて捨象することにした。科学的知見の“翻訳”に関しては、色々な

考え方があろう。私は、実際に避難所生活を余儀なくされている人が、自分のiPhoneを使って私のページを見るかもしれない、ということ想定して、このような対応とした。

そしてホームページ作成中から現在に至るまで、もっともよく考えるのは「一体誰が読むんだろう」ということである。自分の作業は、被災者のためになっていないかもしれない。単なる自分自身の独りよがり、自己満足でしかないかもしれない。そういったことは常に考える。それでもやはりやめることはしなかった。自己満足であったとしても、ほんのわずかな効果しかなかったとしても、それでもやらないよりはましだと思っただけ、きっと先達たちも同じように考え、乗り越えたはずだと思うことにした。

ここまで長々と書いてしまったが、私は多くの方々に色々な形で背中を押していただいて、些細な行動をしてきた。私は現在、日本心理学会の東日本復興支援特別委員会に参加させていただいている。その中で、「震災からの復興のための実践活動及び研究」募集に関する活動に関わったが、震災後1~2か月の段階において、既に数多くの様々な研究や実践活動が計画され、実行されているのを知った。大勢の方々が、自分にできることをきっちり考え、行動しておられた。私のもののようなほんの小さな行動も含め、数多くの様々な活動を現在では見てとることができる。これらがさらなる次の行動を引き起こしていくかもしれない。多くの社会心理学の教科書に掲載されている「ドミノ的プロセス」、「マクロ的帰結」、そういった用語について改めて考えながら、本稿を締めさせていただきます。一日も早く、被災した方々に静かで平穏に暮らせる日々が訪れることをお祈りいたします。

(ひぐちまさたか・広島大学)

若手会員、声を上げる

自分の研究を伝えたい、仲間を募りたい、ネットワークを広げたい、教育について語りたい、と考えている会員はたくさんいるはず。社会心理学会では、若手の会員の方々にそうした機会の1つを提供したいと考え、この企画をスタートさせる。もちろんブログやtwitterで語ることも可能だが、会員全員に届くメディアとして会報をどんどん使っていただきたい。本号ではお二人にご登場願った。

(次ページに続く)

【若手会員、声を上げる】

「読書会・論文講読会の参加メンバー募集」

(菅さやか・東洋大学)

Facebook や mixi などのソーシャル・ネットワークワーキング・サービスや twitter の利用者が急激に増加している昨今、その波に乗り切れていない私にとって、この『若手会員、声を上げる』という紙面上の企画は、大変ありがたいものであると感じ、投稿をさせていただきますこといたしました。

今回、ここでお知らせしたいのは、『読書会・論文講読会の参加メンバー募集』です。大学院生の頃は、ゼミの時間を利用して話題の本を輪読したり、Advances in Experimental Social Psychology などに掲載されている長編のレビュー論文を読んだりして、指導教員およびゼミに所属する院生と議論を交わす機会がたくさんありました。ところが、学位を取得し、ゼミを離れてからというもの、そういった機会が全くと言っていいほどなくなってしまいました。もちろん、本やレビューは、自分一人で読めば良いのですが、実際のところは、授業準備や目の前の細々とした作業に追われ、文献をじっくり読むことをどんどん後回しにしています。元々、長い文章（しかも英語）を読むために、意識的な努力が必要な私にとっては、一緒に読んで下さる仲間がいると、重い腰もひょいと上げられるのではないかと期待しております。まして、自分が企画者となれば、なおさらです。私の動機づけを高めるためのお手伝いをしてください…と言っている訳ではありません。「最近、人と研究の話してないなあ」とか「院生の頃より、頭の回転が遅くなってきたな」とか「最新の研究についていけないぞ」とお悩みの方がいらっしゃれば、是非一緒に文献を読んで、議論をしませんか？

この企画の参加対象は、学位取得後5年以内の方に設定させていただきたいと思っております。いわゆる「社会的認知」の領域に関連するものを中心に読んでいただければと思いますが、それ以外のものでも、理解を共有すべき重要な文献があればご提案いただければ幸いです。会の進め方としては、全員が文献を読んでくれることが前提で、誰か一人が代表して内容をまとめて発表するとい

うやり方でも結構ですし、全員が内容の要約と意見などをディスカッションペーパーとして提出し、それに基づいて議論するというやり方でも結構です。参加していただける方と相談しながら決めていただければと思います。

このような会にちょっとでも興味・ご関心のある方は、是非、菅 (sayaka_suga[at]toyo.jp) までご一報ください。この企画が成立した暁には、またここで、経過をご報告できればと思います。その機会があることを願って、皆さまからのご連絡をお待ちしています。

【若手会員、声を上げる】

「自分の研究の紹介と読書会のお誘い」

(横山智哉・一橋大学大学院)

この度、『若手会員、声を上げる』に寄稿させて頂くことになりました、一橋大学大学院修士課程1年の横山智哉と申します。自分のような若輩者に務まるのかどうか不安ですが、素晴らしい機会だと思い寄稿させて頂くことにしました。よろしくお願ひします。

さて、ここで簡単に自分のプロフィールを書こうと思います。学部時代は心理学科に所属していました。当時からメディア、特にインターネットが有権者に与える影響に研究の関心があったため、卒業論文は「大学生の政治情報源としてのメディア利用と政治参加」という題名で執筆しました。現在は一橋大学大学院に所属しており、社会心理学を専攻しています。

次に、現在の主たる研究関心を紹介したいと思います。現在の研究関心を3つのキーワードで表しますと、1. インターネット、2. 政治的コミュニケーション、3. 政治的知識です。少し具体的に述べますと、オンライン上での政治的なコミュニケーションに興味があり、それが普段の政治的な会話にどのようなフィードバックを与えるのか、その結果としてどのような政治的アウトカムが生じるのかということに興味があります。

また、今回の名古屋大学で開催される第52回大会では「ポータルサイトが投票参加に及ぼす間接的効果」というテーマでポスター発表を行います。簡単に述べますと、ポータルサイト上の政治ニュースを閲覧す

ることで、政治的知識が高まり、間接的に投票参加を促進するというを明らかにしたものです。

自分のプロフィールと研究関心を述べてしまい、少し長くなってしまいました。しかし、上記で自分の研究関心を述べたのも、この寄稿を読んでくださる方の関心や興味と合致する部分が少しでもありましたら、是非気軽に連絡をいただけたら嬉しいからです。

政治的コミュニケーションや、インターネットを含めたメディアが政治システムや、有権者の心理にどのような影響を及ぼしているのかというテーマを扱っている論文の輪読会や、勉強会などを開き、興味を持っている人達と交流し切磋琢磨するような場を設けると共に、自分の研究のネットワークを広げたいと思っております。

今手元にある本であくまで仮ですが、『Delli Carpini, M. X., & Ketter, S. (1996). What Americans know about politics and why it matters. New Haven, CT: Yale University Press.』や、political discussion や political communication などのキーワードで選定した本を輪読したいと思っております。が、もし輪読会を一緒にやっても良いという方がいらっしゃいましたら、その方達と話しあって読んでいく論文、または本を決めていきたいと思っております。

また、普段私は R と Stata を使用しているので、R を利用した統計研究会を開催することも視野にいれております。私事ですが、現在、R で SEM (構造方程式モデリング) に挑戦しています。

なお、私の連絡先は sm111057[at]g.hit-u.ac.jp で、twitter もやっています ([at]tmyokoyama)。気軽に連絡をください。最後にまだ M1 ですが、いずれ博士課程に進学するつもりです。今まで自分の研究領域の話ばかりしてきましたが、他の研究領域の方にもお会いできたら非常に嬉しいです。このような文章を寄稿した機会がなく、拙い文章になってしまいましたが、今まで読んでくださってありがとうございました。気軽に上記のアドレスや twitter のアカウントに連絡ください。学会等でお会いできるのを楽しみにしております。

社会心理学会を支えていただいている方々：見えないところに目を向けて

ご存じの通り、私たちの日本社会心理学会は、会員相互が互いに切磋琢磨しあう組織であると同時に、外の社会とつながりを持ち、またこの分野をサポートしようと熱意を傾けてくださる、外側の組織や団体によって、支えていただいている。このことは「言うまでもない」ことではあるが、往々にして日頃の学会の活動では目に見えてこない。今回から連載で、私たちの学会を支えていただいている賛助会員や、事務方を担当していただいている国際文献印刷社に、社会心理学会との関わりを含めて「自己紹介」をお願いしたいと考えている。

「国際文献印刷社」

笠井健

（株）国際文献印刷社は筆者の祖父である笠井康頼により1951年7月17日に欧文活版組版を主体とする印刷会社として設立されました。本年は創立60周年という記念すべき年にあたります。来年末には江戸川橋に自社専用の新本社ビルが完成し、各ビルに分散しているオフィスの集約を図ることになり、これから来年に向けて、更なる飛躍の節目の年を迎えています。

設立当初から欧文印刷を得意とし、技術力と労働コストの安さから1955年にUCLA発行の数学誌 *Pacific Journal of Mathematics* を受注。1957年に世界最高峰に位置するプリンストン大学発行の数学誌 *Annals of Mathematics*、ペンシルバニア大学発行の *Regional Science* を受注するなど、国外の著名な出版社からの受注を主力業務とし、輸出貢献企業として、日本の外貨獲得政策に大きく寄与してきました。現在も国内学会で発刊される欧文誌の編集・製作に強みを持っています。

筆者は東京理科大学理学部卒業後、日本総合研究所勤務を経て当社に入社しました。入社当時（1990年代後半）は、電算写植・TeX・DTPなどの出現により、欧文活字の優位性は消滅し、活版印刷の終焉を迎えるとともに、Windows95の登場、インターネットの普及と技術革新、ネットワーク化の進展によって産業構造が大きく変化、業態変革が求められていました。

仕事を通じて、先生方との関わりを深めていく過程で学術研究団体（学会）の事業活動と役割を知り、学術研究団体や先生方が抱えている諸問題を熟知していく中で、学術研究団体の事務局機能強化、事業活動及び財務基盤整備の支援を目的とした下記8つの事業を展開するに至りました。それぞれの機能を担う各事業部門が、ニーズに合わせ横断的に連携して適切な対応を行い、学会活動に貢献することを目指しています。

1. 印刷版及び電子版学術定期刊行物の製作
2. 学会事務支援業務
3. 学会会計支援業務
4. 論文審査支援・編集業務
5. 出版業務
6. 学術講演会支援業務
7. インターネット付随サービス業務
8. 労働者派遣業務

社会心理学会との関わり

第20期（永田良昭会長）に、学会事務業務を拝命し、第21期（高木修会長）の2001年4月より業務を開始。2002年度第43回大会（村田先生：一橋大）での実務経験を踏まえて、2003年度第44回大会（安藤先生：東洋大）では、国内学会先駆けとなるインターネットを利用したオンラインによる参加申込、演題募集システムの導入、2004年にはオンライン投稿審査システムの導入と、当社の新しいサービスを積極的に導入していただきました。大会システム構築では大島先生（東洋大）、投稿審査システムでは元吉先生（現関西大）に多大なるご尽力をいただきました。国内学会先駆けとなる新サービスを積極的に導入していただいた高木元会長はじめ皆様方に深く感謝申し上げます。これらの実績が、当社の業容拡大の礎となって今日に至っています。

我々の仕事は、人と人が関わり合う仕事だと考えています。人との関わり合いを積極的に深めることで、お互いの信頼、善意と好意、感謝の気持ちが醸成されるものだと考えています。「関わり合うこと」それが何にも増して大切なことだと学会の仕事を通じて学びました。「より良いモノ作り」、知識・経験に裏付けされた「より良いサービス」の提供をモットーに、皆様方との関係性をさらに深めて、学術振興・科学技術の発展に寄与したいと考えています。

小史

祖父、笠井康頼は明治42年山梨県に生まれる。憧憬していた従兄笠井重治は子供の

ころから将来を嘱望されていたそうで地域の有力者の後援を得て米国へ留学し、イェール大学社会学部を卒業後、ハーバード大学大学院に進学、政治経済学でPh.D.を取得し帰国。滞米中、日本人の英語表現の稚拙さ、特に学者の英語力の不足に慨嘆し、政治家を目指す傍ら少資源の日本国の行方は学術の振興が欠かせない急務だとして、当時の山梨県出身の財界人に欧文学術印刷の普及に努めることの重要性を説き、奉加帳を回し協賛を仰ぐことに賛同を得て、ここに「国際出版社」を設立。設立にあたり従弟である康頼を招集し業務を開始した。その後、重治は東京麹町から市議員として政治活動に重点を置き、終戦後、山梨県から衆議院選挙に出馬、国政に携わり、得意な英語を武器に活躍の場を拡げた。康頼は、太平洋戦争勃発後、招集され従軍し当初は硫黄島への配属予定が、出向間近の台風襲来で編成替えとなり、小笠原諸島父島へと転配され九死に一生を得る。終戦後、重治の政治活動への傾注が「国際出版」の経営を行き詰まらせる結果となった。同時期、康頼の次男が8歳で病没したことを転機として独立を決意し、昭和26年7月「国際文献印刷社」が設立された。

「活字は文明の母にして、印刷は文化の華なり」をモットーに学術雑誌を得意とする頁物印刷で業容拡大に努める。

昭和30年頃、米国は世界のリーダーとして経済の中心をなし拡大・膨張の一途を辿り、印刷物においても自国での生産は割高で、出版社は、英国、イスラエルといった国に発注を行っていたが、両国ともに国力が上昇し印刷コストが高騰。当時、東大の数学教授彌永昌吉先生が客員教授として滞米中、米国の数学者仲間から日本で数学の印刷を手掛けることはないかとの相談を受け、帰国後、当社へ打診していただいたことからカリフォルニア大学出版局で発行していた隔月誌「*Pacific Journal of Mathematics*」(PJM)を受注（後、月刊誌）。

これが日本における印刷の輸出の嚆矢となり、当時外貨獲得に邁進する日本において、輸出貢献企業としての役割を担う。二年後、プリンストン大学出版局から「Annals of Mathematics」という世界一権威のある数学雑誌を受注、両誌ともに製本まで行い世界各地の購読者に直接日本から送り届ける。以降続々に注文が入り、大学ではオレゴン州立大学、スタンフォード大学、ペンシルバニア大学、ガム大学、東南アジアではシンガポール大学、マレーシア大学との取引が発生。出版社では、Holden Days、Prentice Hall、John Wiley & Sons、Addison Wesley、Saunders、Consultant Bureau社などとの取引が行われ、一時は総売り上げの20%が国外からの受注によるものとなる。その後、日本の国力が増し、労働者賃金の上昇、為替変動などを経て、ついには、一般家庭水準

が米国を追い抜く時代となった。昭和50年代初めには国外からの受注は失われる一方で、国内学会で英文誌発刊の機運が高まり、米国からの仕事の喪失の影響を軽微に止めることができた。

昭和50年に父笠井康弘が代表に就任。平成22年、筆者が代表に就任し、現在に至っています。



本年11名の新入社員を迎えました。当社、学会にとって一日も早く強力な戦力となってくれることを期待しています。

* * * * *

『社会心理学研究』掲載予定論文

■27巻1号 (2011年8月刊行予定)

《原著》

- 趙 善英・松本芳之・木村 裕「回想された親の養育行動が大学生の自尊感情に及ぼす影響の日韓比較:行動分析的な解釈」
- 石黒 格「人間関係の選択性と態度の同類性:ダイアド・データを用いた検討」

《資料》

- 渡辺 舞・今川民雄「大学新入生の友人選択状況が親密化過程に及ぼす影響」
- 石井国雄・沼崎 誠「自己価値への脅威が男性のジェンダーに関する潜在的態度に及ぼす影響」
- 浅野良輔「恋愛関係における関係効力性が感情体験に及ぼす影響」
- 田端拓哉・池上知子「自我脅威状況における補償的自己高揚の検討」

■27巻2号以後

《資料》

- 川嶋伸佳・大淵憲一・熊谷智博・浅井暢子「タイトル多元的公正感と抗議行動:社会不変信念、社会的効力感、変革コストの影響」

会員異動

(2011年5月14日~2011年8月5日)

■新入会員

《正会員》

- ・一般会員
- 岩林明美 ((株) 応用社会心理学研究所)、

- 佐柳信男 (国際基督教大学教育研究所研究員)、隅田浩司 (東京富士大学経営学部経営学科准教授)、中嶋励子 (東京女子大学人間科学研究科特任研究員)、橋本栄里子 (株式会社枝林舎代表取締役社長)、福田哲也 (広島大学大学院教育学研究科研究生)・大学院生

- 稲垣亮子 (愛知淑徳大学助教、名古屋市立大学大学院人間文化研究科修士課程在学中)、榎並純子 (広島大学大学院総合科学研究科)、姜 惠慶 (東京国際大学大学院社会学研究科)、工藤大介 (同志社大学大学院心理学研究科)、後藤沙奈 (広島大学大学院教育学研究科)、谷畑まゆみ (目白大学大学院現代心理学研究科)、寺本水羽 (上智大学大学院経済学研究科)、村瀬英子 (愛知淑徳大学大学院心理学研究科)

■退会者

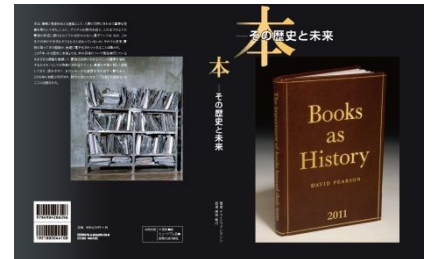
- アフタモヴァ イローダ、五十嵐三恵子、奥川 裕

■所属変更

- 田中 淳 (東京大学情報学環)、塚本恵信 (名古屋経済大学大学院人間生活科学研究科研究生)、牛田好美 (京都ノートルダム女子大学生活福祉文化学部生活福祉文化学科)、針原素子 (東京女子大学現代教養学部人間科学科心理学専攻特任講師)、佐藤 望 (近畿大学総合社会学部)、井田美恵子 (NHK放送センター経営計画局)、高木邦子 (静岡文化芸術大学)、佐野予理子 (清泉女学院大学人間学部心理コミュニケーション学科講

近刊 (大英図書館との共同刊行)

『本—その歴史と未来』"Books as History"
 デヴィッド・ピアソン著・原田範行訳
 A4判 208頁 予価 4,200円 (税別)
 電子書籍出版元年といわれる年に世界最高の図書館「大英図書館」が本の歴史と未来を問う。本は文章の記録を超えた存在とその価値は永遠と説く。著者は書誌装丁の権威、デヴィッド・ピアソン。



(かさいたけし)

- 師)、田島 祥 (お茶の水女子大学大学院生)、渡部昌平 (秋田県立大学総合科学教育研究センター准教授)、関根 薫 (皇學館大学現代日本社会学部)、荒井崇史 (科学警察研究所犯罪行動科学部犯罪予防研究室)、森岡千穂 (松山大学人文学部社会学科講師)、加藤由樹 (相模女子大学学芸学部講師)、高岡しの (関西学院大学大学院文学研究科)

メール・ニュースの広告募集

日本社会心理学会メール・ニュースに掲載する広告を随時募集しております。掲載を希望される方は、日本社会心理学会事務局までご連絡ください。
 E-mail: jssp-post@bunken.co.jp
 掲載料: 1件 (1回あたり) 1,000円 (後日事務局より請求書をお送りします。)

編集後記

前号から広報編集の担当をさせていただくことになりました范知善(ボム・ジソン)と申します。いよいよ第52回大会が近づいてきました。外国人留学生である私には、あまり旅行の機会が無いので、東京以外のところを訪ね、少し観光もできるという楽しみとともに、社会心理学という共通点を持つ様々な方との出会いという二つの大きな楽しみがございます。今年も大会での貴重な新しい出会いと、本地のきしめんを食べることをとても楽しみにしております。